# 母子保健事業を継続中 ガザ

ガザでは、脆弱層の多い地域で、妊産婦と乳幼児への 医療と栄養支援を続けています。ガザの三か所の診療所 合計で、一月1か月間に、妊産婦が約400人、乳幼児が 2200人以上来訪し、栄養支援を受けた乳幼児は700人近 く、また120人以上が心理社会的サポートを受けました。

度重なる戦争、封鎖、失業と生活苦、コロナ禍によって、 多くの人が十分な栄養を取れず、健康状態が脅かされ、特 に乳幼児の6割が貧血など栄養状態に問題を抱えていま す。妊産婦の約半数も鉄分欠乏の症状があり、また感染 症の危険にさらされているのです。

昨年からは、ベテランのお母さんなどを中心に、地域で活動するボランティアの養成にも力を入れていて、こうした女性たちが、幼稚園などを回って、園児の身長や体重を測り、成長に心配がある子どもを診療所に紹介しています。また、園児の母親たちに対しては、現地で安価で購入できる食品を使って、少しでも栄養をつけるレシピを教えています。

# リハビリと 心理サポートも継続中

ガザでのリハビリ支援も継続しています。

ワヘイデさんは、昨年5月の爆撃を受け、足を膝上から 切断しました。足を失った父親のことを、娘さんは当初受 け入れることができず、父親と話すことを拒否していまし た。しかし、目の前でリハビリに取り組む父親の姿を見てい て、また心理士が本人だけでなく娘さんにも支援を続ける なかで、「障がいを負ってもお父さんはお父さんだ」と理解 し、父親の障がいを受け入れることができました。いまで は、義肢をつけて歩行できることを目指す父親のリハビリ にも協力をしているそうです。

11歳のモハメドくんは、洗濯ものを取ろうとして、2階から転落して、大腿骨を骨折し、腿にボルトが入ったままです。手術はしたものの、リハビリを受けることを拒否して、心も閉ざしたままでした。理学療法士と心理士が家族とも協力して、モハメドくんと信頼関係を築き、心を開いてもらうことができたので、いまではリハビリにも熱心に取り組んでいます。また事故後は学校にも関心を持っていませんでしたが、最近はオンライン授業に参加するようになりました。「早く良くなって、以前のようにサッカーをやりたい」と前向きです。リハビリは痛みを伴うので、理学療法士などとの信頼関係を築くのはとても大事ですし、また、心理的にも前向きにならないと成果も出てこないのです。





ワヘイデさんと 娘さん



Gaza

大腿のボルトが 痛々しいモハメドくん

### 先行きの見えないレバノン

# 子どもたちは頑張ってます



コロナ禍に加えて、レバノンの経済社会状況は最悪の 状態が2年半続き、現地通貨の価値は10分の1に下がり ました。燃料がなく大きなスーパーでさえ真っ暗です(写 真上)。感染状態も深刻で、最近は非常に多くの人が陽性 になっていますが、支援活動は継続しています。子どもたち を難民キャンプの狭い家に閉じ込めておくわけにはいかな いので、感染予防に注意しながら、幼稚園では、1クラス を二つに分けて、交互に通園してもらっています。また、学 習支援クラスも同じように子どもたちの通学を進めていま す。1日のうち1時間か2時間しか電気がないため、オンラ イン授業についていくことのできる子どもはほとんどいな いからです(幼稚園(写真中)と学習支援クラス(写真下)。

新型コロナウイルスについて、キャンプの住民に対する 衛生教育や相談の事業も継続しています。オミクロン株が 流行しているため、これまで以上に多くの人たちが関心を 持ち、相談が増えています。特に、閉そく状態で増えてい る家庭内暴力や薬物依存、家族関係などの相談が多い傾 向は変わらず、心理士たちは父親への働きかけを積極的 に進めています。





爆発事故現場

## 学校や病院などへ 手洗い場の設置

首都ベイルートでは、20年8月に大爆発事故がありまし た。その現場近くにある消防署、病院、防災センター、学 校、商店街、モスクなど公共施設11か所に、15台の簡易 手洗い場を国連と一緒に設置しました。その一つカランテ ィナ消防署は爆発事故で破壊されただけでなく、初期消

火に携わった10名の 消防士が犠牲になっ ています。ますます悪 化する衛生環境の中、 感染が拡大する新型 コロナウイルスへの 対策の一つとして、ま た地域の復興支援 の一環です。





青い点は手洗い場の設置場所



カランティナ消防署